

佐々木喜善論

— 口承芸術への逆襲 —

石井 正己

一、佐々木喜善資料の価値

平成一六年（二〇〇四）九月一日から一〇月三一日まで、遠野市立博物館では、第四九回特別展で「日本のグリム・佐々木喜善展」を開催した。今回、遺族から二〇〇〇点を越える資料のすべてが寄託されたので、その目録を作るための整理を行いながら、この展示を実現したのである。こうしたかたちで喜善を正面から評価した展示は、遺族はもとより、遠野市民にとてもかねてからの悲願であった。

喜善は、昭和八年（一九三三）に亡くなつたので、それ以来、七一年にわたつて、遺族は残された資料を保管してきたことになる。喜善の死は早かつたが、その後も民俗学の先駆者は次々と亡くなり、こうした資料の多くが破棄または売却の憂き目に遭つてゐる。そうしたことを見れば、今回の寄託は快挙と言つてもいい。我々は、この資料を永久に保存し、広く公開するためのシステムを考えねばならない。責任は殊の外重い。

喜善は、昭和八年（一九三三）に亡くなつたので、それ以来、七一年にわたつて、遺族は残された資料を保管してきたことになる。喜善の死は早かつたが、その後も民俗学の先駆者は次々と亡くなり、こうした資料の多くが破棄または売却の憂き目に遭つてゐる。そうしたことを見れば、今回の寄託は快挙と言つてもいい。我々は、この資料を永久に保存し、広く公開することだつた。⁽²⁾

しかし、全集の編集作業を進めてみると、喜善が書いた文章は思いの外多かった。新聞は早く散逸していたようで、編集段階で見つかったものがずいぶんある。だが、発見が全集の刊行に間に合わなかつた文章も多く、それらは最後に載せた「解題」で指摘するにとどまつた。⁽³⁾その後もさらに見つかつてゐる文章があり、喜善の業績の全容が把握できたというにはまだ程遠い段階にある。

それに対しても、今回の寄託は書籍・雑誌も含まれているが、むしろ、原稿、日記、ノート、カード、書簡、写真などが中心であつた。全集はすでに発表されたものを中心に編んで、それに日記と柳田にあてた書簡を加えたので、それ以外の一次資料には手が届かなかつた。これら一次資料の中には、発表に至るまでの収集・整理に関わつたものもあれば、そのまま筐底に秘められてきたものもある。

特に、今回寄託された資料の中には、喜善にあてられた書簡が多数含まれる。柳田国男をはじめ、金田一京助、中山太郎、本山桂川、ニコライ・ネフスキイ、早川孝太郎などの民俗学者の書簡をはじめ、泉鏡花、水野葉舟、前田夕暮、三木露風、北原白秋など作家の書簡もある。これらは個人全集に收めようとすると、喜善の文章ではないので、その範囲を逸脱してしまつ。だが、喜善の世界が、まさにそうした人間関係の中から生まれてきたことは間違いない。

全集としても、喜善あての書簡を入れた別巻を含めて、いず

れ別に新たな編集をすることが必要になるだろう。喜善の場合、徐々に研究が増えて来たとは言え、柳田に較べればほとんど進んでいかなかつた。⁽⁴⁾そのためには、まだまだ基礎的な研究が遅れてゐる。だが、喜善の場合は日記が残つていて、原稿の執筆や書簡の往復が丁寧に記録されているので、それを拠点にした総合的な研究を行うことができる。

一方、喜善の位置づけは、口承文芸研究でも意外に遅れていた。『遠野物語』の話し手としては有名になつたが、柳田に協力した地方人の一人だったという程度で、その研究の価値が認められることはほとんどなかつた。それに対して、今回の「日本学術院のグリム・佐々木喜善展」は、言語学者の金田一京助が喜善を「日本のグリム」と呼んだということにちなむ。そうしたこともあるつて、今回は『遠野物語』以後の昔話の採集と研究に焦点を当てて構成したのである。それは、本格的な佐々木喜善研究の幕開けと言えるかもしれない。⁽⁵⁾

喜善が作った昔話集は、『江刺郡昔話』『紫波郡昔話』『老嫗夜譚』『聴耳草紙』のどれを取つても一様ではない。⁽⁶⁾しかもそれらを見て行くと、現在の口承文芸研究がいつの間にか自明としてしまつた事柄に疑問を感じることが多い。そして、今、口承文芸研究は、内在的な反省が必要な時代を迎えている。次の時代を創つてゆくためには、その原点ともなつた喜善の資料は、第一級の価値を持つてゐると思うのである。

ここでは、専門分野に属するために、一般向きの特別展の解説

説では踏み込んで触れられなかつた、喜善の昔話叙述の内実を考えてみたい。寄託された資料の中には、親友小笠原謙吉が喜

善に送つた昔話や伝説の資料がそのまま残つてゐる。そこには、後の昔話研究が重要な根拠に据えたり、厳しく排除したりした資料の原典が見つかる。そうした原典の投げ掛ける問題を共有しておきたいと思うのである。繰り返しを厭わずに引用するのも、そのためと考えていただきたい。

二、「桃ノ子太郎」の出自

柳田国男は、昭和一一年（一九三六）、閑敬吾との共編で『昔話採集手帖』を刊行した。代表的な昔話一〇〇話を選定して、偶数頁に筋書きを載せ、奇数頁に違いを書き入れられる形式を作つた。この試みは残念ながら失敗に終わつたが、日本の昔話を体系的に採集しようとした意義は大きかつた。

柳田は一〇〇話の最初に「桃太郎」を掲げた。その末尾には、「岩手県紫波郡・紫波郡昔話」とある。これによつて、「桃太郎」の筋書きは、喜善が大正一五年（一九二六）に刊行した『紫波郡昔話』の「(一一) 桃ノ子太郎」に拠つたことが知られる。その末尾には、「藤田留藏」の名前^が見える。

この昔話は『紫波郡昔話』に掲載される前に、大正五年（一九一六）一二月の『郷土研究』第四卷第九号に、佐々木繁「陸中紫波地方の桃太郎」として発表されていた。それは次のように

な話だつた。

『父と母とが山に花見に行つた。昼飯を食べて二人休んで居ると、母の腰もとに一つの桃が転がつて來た。母は其を拾つて懷に入れて帰つて、朝ま起きて見るといつの間にか桃が小さな赤坊になつて居た。だから名を桃太郎とつけて置いた。

『桃太郎はだん／＼大きくなつた。父と母が畑に出て居るうちは、おとなしく留守をしながら学問をして居た。ある日一羽の鳥が桃太郎の家の前の木に来てたかつて、『桃太郎さん桃太郎さん、地獄から手紙を持つて来ました』と言つて桃太郎を呼出した。桃太郎は其手紙を読んで見ると、鬼が日本一の黍団子を持つてくれると云ふ手紙であつた。『桃太郎は母が畑から帰つて来るのを待つて居て、日本一の黍団子をこしらへて貰つて、それを背負つて家を出かけた。幾日も／＼も旅をしてやつと鬼の居る国に着いた。桃太郎は黍団子を出して一つづゝ、鬼に遣ると、鬼どもは喜んでそれを食ふた。処が其鬼は皆酔うてごろ／＼とそこに眠つてしまつた。そこで桃太郎は御姫様を車に乗せて其所を出た。鬼は目を覚まして火車に乗つて桃太郎の後を追つかけて來た。

『桃太郎の車は海の上を走らせたが、鬼の車は火車なので仕方がなく引返して往つた。桃太郎は家へ無事に還つて

来て父も母も喜んだ。御姫様の事を御上に知らせたら沢山の金を褒美に下さつた。それで桃太郎の家は長者になつて楽しく暮したと云ふことである。

この時には、「(藤田留藏)」の名前は記されていない。当時は原典の筆記者を明記することなど念頭になかつたにちがいない。むしろ、いちいち筆記者など明記しないことのほうが普通だつた。ここに筆記者がないことを非難することは当たらない。

この「桃ノ子太郎」は、小笠原が喜善に送つた資料を見ると、小学生が書いた作文の中に見つかる。冒頭に「高一 藤田留藏」とあり、「紫波郡昔話」の原典であつたと考えられる。それは、次のような話であつた。

昔の話

高一 藤田留藏

ある時父母が二人花見について昼めしをたべていた所が桃が母のこしもとにころできたのをふところの中へ入れて内に帰りました。綿くるで寝にをして成長させました。父はなんとなをつけたらよいといた所が母は桃太郎とつけました。桃太郎が父母だつ畠に出て農業するから桃太郎のすをせよと父母がいつけて畠にいきました。所が桃太郎がすをしてながら学問をしてたところが鳥が桃太郎の内の後の木にたかて地獄から手紙をもつて鳥がさかんでをたから後^(ママ)の行きました。ところが手紙にをにが日本一のきみ

だごもつてきてくれるといふ手紙でありました。それだから父母が畠がらあがてきから日本一のきみだごを母がこしらいて桃太郎がきみだごをしよていたところが、桃太郎が問をたゞいたところが、をにが日本一のきみだご一ちごもともといて一ちづつくれたところがおにがよつてしまいました。それでおしめ様を車にのせてきましたところがおにがひ車にのつてきたところが海にはいてる内に桃太郎が内に帰へて父母だつにしらせました。それで内の人人が上にしらせたところが金が下りました。それで長籍になつて父母をたゞへてあつかせたことをききました。

子供の作文は煙山尋常高等小学校で、大正三年（一九一四）に書かれたことが知られている。⁽⁸⁾これは、高等科一年生の藤田留藏が書いた作文であった。「昔の話」という題があることからすると、先生がこの題で求めた課題作文だつたと思われる。

これらの作文は先生が自発的に実施したというより、小笠原の依頼を受けて協力したものと推測される。

この文章は、末尾に「……たことをききました」とあり、誰かから聞いた話をそのまま書こうとしたことがわかる。文章が「ます」を使った敬体になつてているのは、聞いた話の実態というより、作文を求めた先生に提出することを意識した結果であろう。

ここには、「問」（正しくは「門」）、「長籍」（正しくは「長者」）

など、漢字の誤りが見られる。正確な仮名遣いが困難だったことは、「ころで」（正しくは「ころんで」）、「をた」（正しくは「をつた」）など、音便の表記に観察される。だが、そうしたことが、むしろ、話をそのまま文字化しようとした苦心だったことに気がつく。

だが、重要なのは、「なんとなをつけたらよい」「烟に出て農業するから桃太郎るすをせよ」「日本一のきみだー」（ちー）もとも」といった会話文である。それぞれ「何と名を付けたら良い」「烟に出て農業するから、桃太郎、留守をせよ」「日本一の孫団子一つ、御尤も」の意味である。「日本一のきみだー」もつててくれる」という手紙文とともに、昔話の会話を省略せずに書いたものと想像される。

先の『郷土研究』と較べてみると、それには、桃を綿にくるんで寝床（？）に置いたり、父が尋ねたのに対して母が命名したりしたことがあるが、基本的なストーリーは変わらない。全体を通して言える相違は、会話に敬体を残すものの、文体が敬体から常体に改められている点に見られる。

そうした違いはあるにしても、共通語で書かれた点は一致する。その中で喜善は、「父」「母」のように振り仮名で方言を当てたり、「たかつて」のように原典の方言を残したりしたことでも確認できる。こうしたことからすれば、部分的にでも、方言を入れたり残したりしたのは、語りの復活であり、復元であつたと言つていいことができる。

しかし、根本的な違いは言葉そのものにある。翻訳と言つてもよいほどの大きな書き換えがなされている。子供の文章は表記が不正確でも、聞いた話に沿つて表記する努力をしていた。しかし、喜善の場合は読むための昔話にすっかり書き換えていく。一文を短く書く工夫をしているが、そこにはこの雑誌を編集していた柳田の手が入ったかとさえ推測される。

なお、「紫波郡昔話」は、「郷土研究」からの転載ではなく、原典に戻つて書き直されている。ここには引用しないが、『紫波郡昔話』の昔話叙述のほうがむしろ原典に近い。喜善の中で搖らぎがあり、原典にできるだけ忠実な書き換えをしようとした様子が観察できる。しかし、忠実と言つても、読むための昔話を書くという点では一貫しているように見える。

三、猥談へのまなざし

「桃ノ子太郎」は、柳田国男によって、「桃太郎」の最も原型的な例話として取り立てられ、その後の昔話の採集や研究に多大な影響を与えてきた。しかし、その一方で、同じように、小笠原資料にあつた子供の昔話でも、こうした地位を得られずに消されていった話もあつた。

すでに報告したように、喜善はこの資料から書き換えて『紫波郡昔話』に載せようとしたが、それを読んだ柳田が抜き取つた話が四話あった。⁹ その原稿は、書簡とともに返送されたため

に、今も喜善の資料の中に残っている。

その中の「人間の始まり」は次のようになつてゐる。ここには、

柳田の加筆が入った最終段階を示しておく。

(一一〇) 人間の始まり

或所に爺婆があつた。或時一人の小坊様が来て、爺様角力をしようとして炉にあたつて居て爺様の内跨を見て、爺それは何だと言つた。爺様はこれは横の余つた所だと言ふと、今度は小坊様は婆様に向つて婆様お前の内跨のそれは何だと言つた。婆様はこれは横の足り無い所だと言つた。小坊様はそんなら其の余つた所と足り無い所とを合せて見ると言つた。合せると子供が出来て此世を開いたものであります。其れで世の中は子を呉れたり貰つたりして渡つて来たものであります。(高橋仁次郎)

ス「ハ／アル話ハ光ツテキルホドオモシリク／アル話ハ小学生ノ話ノ如シ／本ニナツタ上デ細カク評ヲシ／タイト思フ／恐クハ年数ノカ、ツタ為ナラン」と書き入れてゐる。柳田がこの話を削除した理由は、「アマリニ無内容」であり、「古キモノ」でないという二点に集約されている。「無内容」というときの「内容」は、実は「古キモノ」という価値観と無関係ではない。柳田は昔話それ自体に関心があるのではなく、そこに受け継がれてきた「古キモノ」にこそ価値を見ていたのである。

もちろんこの話は、イザナキノ命とイザナミノ命の性交の神話を想起させる。しかし、柳田は、神話から連綿と続いてきた「古キモノ」ではないと判断した。「無内容」とする否定的な言説は、この話が神話どころか、猥談であるという認識と深く関わつてゐる。柳田は昔話の中に笑話を認め、昔話が笑話化することを認めたが、猥談そのものは研究対象から排除した。⁽¹⁰⁾この削除も、そうした学問の組織化と対応している。

この話も小笠原の資料を見ると、やはり小学生の作文の中に見つかり、「高一 高橋仁次郎」と記名があるので、『紫波郡昔話』の原典と知られる。それはこんな話であった。

高一 高橋仁次郎

話名の「人間の始まり」は、最初「人間の原始」であつたが、喜善自身の手で修正されている。この話は最後に来て「あります」と敬体になつてゐるが、そこに柳田の加筆はない。柳田は「其れ」を「それ」に修正しているが、最後には「其れ」が残つてゐる。こうした状態から見ると、柳田は途中まで読んだ段階で、もうこの話は削除すると決めていたものと思われる。

柳田は返送時に入れた筆で、欄外に、「コレハアマリニ無内容、且ツ古キモノニアラズ」とし、空欄には「実ニ不思議デタマラ

或る所におじいさんとおばあさんとありました。所はそこには子ぼう様はきて所はおじいさんはすまをしよてあたつておつてそれはなんだといつてこれは横のあまたたどこであ

るといひました。こんどはおばあさんのこと子ぼうさま

はなんだといひました。これは横のたれないとこであるといひました。そんなら横のあまつたとことたれないとこと合せて見ろといひました。そした所は子はできてこの世を^(マダ)関ひたものであります。それで世の中は子をもらつたりくれたりしてつたわつてきたのであります。

原典には話名がなく、喜善が付けたことがわかる。「横」はカンと読み、「木があつまり生える」の意味である〔『大漢和辞典』〕が、「貫」のほうがいいかもしない。「すまをして」とは意味がわかりにくいか、喜善は「角力をしようとして」と解釈している。文体を見ると、最初は常体に書き改めたが、最後に来て、原典にあつた「あります」という敬体が残ったことになる。その中には、「炉にあたつて居て爺様の内跨を見て」のような補筆があるものの、全体に大きな加筆はない。この場合は原典を尊重して書き換えたことになる。

こうして見ると、柳田が「アル話ハ光ツテキルホドオモシロク／アル話ハ小学生ノ話ノ如シ」と判断したのは、『紫波郡昔話』には、小笠原自身が祖母から聞いた話と小学生の書いた作文とが混在していることを対応する。柳田はこの時点で、小学生の作文が入つていてことを知らず、「実ニ不思議デタマラヌ」という感想を漏らしたが、その推測はほぼ的中していたことになる。実際には、「小学生ノ話ノ如シ」ではなく、「小学生ノ話」

そのものだったのである。

しかも、小笠原資料の中にはいくつかの猥談が入っていて、それを喜善は『紫波郡昔話』に入れたいと考えたのである。子供の話だから載せないとか、猥談だから排除するという判断はなかつたことになる。こうしたところには、喜善の昔話観がよく現れている。喜善にとっては、昔話に「古キモノ」を探すより、目の前にそうした話が伝えられているのなら、その現実のほうが遙かに重要だったのである。

だが、こうした喜善の態度から、猥談を排除した柳田を一方的に非難するのは当たらない。柳田は明確に、昔話をめぐる学問の確立を優先していた。昔話を学問の対象にする必要があった。それは、喜善の昔話観とは決定的な違いである。しかし、人々の重要な談話の一つであつた猥談を排除したことについて、今はもう自由に議論ができる環境になつたと思う。喜善の嘗みは過去のことではなく、改めて顧みていい価値を持っている。

四、余りに無内容な話の復活

喜善の昔話の採集と研究は、昭和六年（一九三二）刊行の『聴耳草紙』に到達点があった。そこには、柳田が「序」を寄せ、喜善がそれに応じて「凡例」を書いている。柳田は喜善の採集態度を高く評価しているが、喜善の見解は必ずしも柳田に沿うものではなく、柳田の昔話零落説とは相容れない昔話成長説を

述べている。そこには、少なからぬ不協和音が響いている。

喜善が昔話成長説に立つて収録したと考えられる話に、次の二話がある。

九〇番 爺と婆の振舞

昔アあつたとさ、或所に爺と婆とあつたと、爺は町に魚買ひに行つたジン、婆は家に居て、庖丁をもつて何か着る音をトントンさせて居た。其所へ爺様が魚をたくさん買つて来て、晩けは娘だの孫どもをみんなみんな呼んでお振舞ひをすべえナと言つた。そして晩景になつたから、娘だの孫だのが大勢來た、爺那婆那、喜んでニガニガと笑つたとさ…（中野市太郎氏、當時尋常小学校生徒。）

九一番 狼と泣児

或る雨の降る夜、山の狼が腹がへつて、大きな声で、おう、おうと啼きながら山から下りて來た。（マヤ）時百姓家の子供が泣き出したので、母親はお前がそんなに泣けば、あの狼にやつてしまふぞと言つてしまふぞと云ふ

狼は恰度其時、其家の壁の外を通つたので、これはよい事を聞いて、それぢや彼の子供を食えると思つて喜んだ。すると内の子供の泣き声がばつたりと止んだ。母親がああ、あ、こんなによい子を誰が狼などに遣るものかと言つた。狼は落胆して行つてしまつた。

（此話と九〇番は紫波郡昔話を編む時に集つた資料を、余りに無内容だと思つてはぶいて置いた物である。ところが今考へると、斯う謂ふ物こそ昔話の原型を為すものではあるまいかと思つたから採録して見た。）

昔話の発生と謂ふものは一面に於いて斯うした断片的な単純なものから先づ成立つて段々と幾つも寄り集り永年かゝつて一つの話になつたものであつたかと想像したのである。さう謂ふ観方からはこれらは尊い種子であらう。）

この二話は、「紫波郡昔話」を刊行する際に、「余りに無内容だ」と判断して省いたが、「昔話の原型を為すもの」と考え、「聽耳草紙」で新たに収録したのである。これらは「断片的な單純なもの」だが、「昔話」はそれらが寄り集まつて、「一つの話になつたもの」であるという「発生」の考え方にはなつたものであるといふ。）

それは今で言えば、世間話から昔話が生まれてくるという見解だつたと言えるかもしれない。しかし、この時、柳田にも「世間話」という概念は明確ではなかつた。しかし、こうした昔話成長説が見いだされたのは、喜善には、すでに、大正一五年刊行の『東奥異聞』があつたからに他ならない。『東奥異聞』は「偽汽車の話」に代表される世間話研究の先駆的な業績であつた。すでに見たように、こうした話を「余りに無内容だ」と判断

したのは、実は柳田だつた。むしろ、『紫波郡昔話』で、喜善がこれらを入れようとしていたことは、残された資料からも明白である。ここにこうしたかたちで話を再び持ち出してくることは、一般的の読者にはわからなかつたが、実は柳田に対する激しい批判を意味していたのである。

ここに引いた「九〇番 爺と婆の振舞」は、喜善自身が省いたかのように書いているが、『紫波郡昔話』に入れようとした原稿から、柳田が抜き取つたことが確かめられる。原稿用紙には次のように書かれていた。

(一一一) 昔漸

或所に爺と婆とあつた。爺は町へ魚を買ひに往つた。婆は家に居て牛蒡人参こんにやく豆腐を料理した。其所に爺は魚をたくさん買つて還つて來た。そして其晩は息子嫁子聟どもや孫共もを多く呼んで秋振舞をした。爺婆は孫子の喜ぶのを眺めて一夜にこに笑つて居た。(アマ) 野市太郎

柳田は返送時に入れた筆で、欄外に、「コレモ昔話トハイフベカラズ」と書き入れている。「昔漸」と題する話だつたが、柳田は「昔話」ではないと判断して抜き取つたのである。両者を較べると、『聽耳草紙』は、「昔アあつたとさ」「とさ…」という冒頭と結末をはじめ、全体的に昔話らしい叙述に書き換えたことが確認できる。

一方、「九一番 狼と泣児」は『紫波郡昔話』から省いたとするが、実は「(九八) 狼の落胆」に収録されていた。『聽耳草紙』には、『紫波郡昔話』に載せた話は再録していないので、『紫波郡昔話』の確認を怠つたのである。それはこんな話だつた。

(九八) 狼の落胆

或夜狼が餌物を探して村をうろつき歩いて居て、或家の軒下を通つた。家中では子供が頻りに泣いて居た。それを母親が、これこれそんなに泣くなら山の狼に食はしままうてやと言つて居た。狼はそれを聞いてこれはよいことを聞いた。やつとの次第で食物にありついたと思つて喜んだ。

だが子供は母の言葉に怖れてすぐに泣き止んだ。すると母親はあゝよしよし泣くのを止めたら狼などには誰が遣るものか、いつまでも俺の愛子(めんこ)だメンコだと言つた。

狼は折角のものをと思つて落胆してすゞすゞと山に帰つた。

『聽耳草紙』の注記の「紫波郡昔話を編む時に集つた資料」とは、すでに見てきた小笠原資料のことである。そこには、やはりこれらの原典になつた二話が見つかる。

昔話 高一 中野市太郎

ある処にちとばとありました、ぢは町に魚を買ふに行きま

した。ばなは内に居てはうても持つて何か切る音がとんとんと聞えました。其こにぢなは魚をたくさん買つてきました。ぢなはばんげは娘だのむす子をよんでもうそうをしやうといつていました。ばんげになつてむす子や娘が来てばなぢなよろこんでにがくと笑つて居ります。

或夜に内の子供がなきだしました所が母はだまして狼にやるぞといへました。ちようど其の時は狼がしよ子のあき門より見よろこんでいました。其の中に子供が泣くのが止みました所で大狼もしようがないから赤い舌をペロリと出して行つてしましましたとさ。

前者は「昔話」という題があり、先の「昔の話」に近い。先生から出された課題は「昔話」だった可能性もある。また、前者は「高一 中野市太郎」とあり、「九〇番 爺と婆の振舞」の原典だったことが明確だが、後者は無記名である。子供の作文には、無記名のものが多い。必ずしも記名を求めなかつたのは、子供の成績を評価するためには書かれたものではないことを示している。この作文は専ら、子供たちから「昔話」を集めようとしたアンケートだったにちがいない。

原典と『紫波郡昔話』『聴耳草紙』を較べると、『聴耳草紙』の「九〇番 爺と婆の振舞」は『紫波郡昔話』の原稿を経由せず、原典から新たに書き起こされたことがわかる。「九一番

狼と泣児』は原典に較べれば、『紫波郡昔話』とよく似ているが、やはり新たな書き起こしだろう。そうした点では、『紫波郡昔話』の「桃ノ子太郎」の場合とよく似ていた。

「桃ノ子太郎」の場合、新たな書き起こしのほうが原典に忠実になったが、「九一番 狼と泣児」はそつとも言いがたい。むしろ、原典を離れて、それぞれ自立した話として書かれている。「九〇番 爺と婆の振舞」の場合は、『紫波郡昔話』の原稿は原典に忠実だったが、『聴耳草紙』は遠く離れていることがわかる。

五、子供の話と書き換えの重視

ここで取り上げてきた原典は、すべて小笠原資料の中にある話であった。こうしたことからすれば、喜善の執筆というのは二次的なものであり、むしろ、子供の話を発見した功績はまず小笠原に帰すべきかもしれない。しかも、すでに見たように、先生が書かせた作文の中にたまたま昔話が含まれていたというのではなく、「昔の話」「昔話」を課題に出して書かせた作文だったと思われるからである。こうした課題を先生に依頼した背景には、小笠原の判断があつたはずである。

しかし、小笠原と喜善の間にどのようなやりとりがあつたのかは、わかつていない。喜善の資料には、小笠原から来た書簡が残っているので、それらが読み解ければ、子供の作文によつて昔話や伝説を集める方法を考えた経緯が明らかになるかもし

れない。喜善の日記の中にも、小笠原との交流が繰り返し出てくるので、そうした観点から、改めて二人の日記や書簡を読んでみる必要がある。

それにしても、これらの作文が書かれたのが大正三年だったというのは、やはり早い。『遠野物語』は刊行されていたが、この時期には、柳田も喜善も昔話の価値を自覚していなかつた。そうしたことからすれば、小笠原がいち早く昔話を発見したと言えなくもない。だが、これを世に出したのは喜善である。喜善の働きがなければ、これらが世に出ることはなかつたことを考えれば、喜善を「日本のグリム」と呼ぶことに迷いはない。

先の作文は、その表記と内容の素朴さから見て、子供が祖父母や両親から聞いた話ではなく、彼ら自身が知っていた話を書いたものだろう。ここには、伝承者としての子供の発見がある。その後、子供というより、もつと年上の女学校生を使った昔話集が盛んに作られるようになる。しかし、その場合も女学校生は伝承者ではなく、多くは身近に語り手を探して記録する採集者だった。子供が伝承者であるという認識は、その後も埋没しきたまになり、村のお年寄りから昔話を聞くというマニユアルだけが絶対視されてきたのである。

そうしたことが起こった背景には、柳田が子供の話をほとんど認めていなかつたことがあるかもしれない。柳田は『紫波郡昔話』を読んだ際に、「（九八）狼の落胆」を残した。この話以外にも、原典が子供の作文だった話は一七話も含まれている。

柳田は、これらが子供の作文だとは見抜けなかつたらしい。もしそうだと知つたら、すべて削除を命じた可能性が高い。

やがて、戦後になつて昔話の採集が進み、話型索引が作られた。その後、録音機が普及すると、地元の研究者や大学の研究会による調査が一般的になる。それと相反するかのように、児童や生徒を使つた話集めは「間接採集」と呼ばれて、価値が低いものと貶められてゆく。⁽¹¹⁾ 子供たちが重要な伝承者であることを再認識したのは、つい近年のことにも属する。そうした歴史を考えるならば、喜善が子供の話にも分け隔てせずに耳を傾けていたことは、改めて注目していいことだろう。⁽¹²⁾

また一方で、喜善の昔話叙述の本質には、書き換えの問題があつたことが注意される。自分の経験を越えて昔話を集めるためには、資料を書き送つてもらうというのが必須の方法だった。昔話採集の黎明期に、『聴耳草紙』のような東北地方北部に広がる昔話集を編むことが可能だったのは、多くの協力者から送られた資料の書き換えが行われたからに他ならない。

だが、それだけではない。実は、書き換えという問題は他人の資料だけではなく、喜善自身のノートにも向けられていた。喜善が編んだ『老嫗夜譚』は一冊目のノートが残つているが、そこから昔話を大きく書き換えている。⁽¹³⁾ 録音機などなかつた時代、昔話は書くことによつてのみ記録された。自分自身の資料でさえ書き換えから逃れられるものではなかつたのである。

今日の技術や価値観から見て、厳密な意味から喜善の書き換

えを否定することはやさしい。しかし、さらに重要なのはその

こと自体を直視することだろう。優れた伝承者が昔話を集めて書き換えたのである。それは、その後の誰もが経験したことのない世界を作り上げることだった。こうして伝承者が採集者になつて書き換えてゆく現場は、その後に作られた記録と再話と

いう二元論的な認識を遙かに越えていると思われる。

現在、日本における昔話の調査はほぼ達成されたかに見えるが、一方ではその資料批判が厳しく行われなければならない時代を迎えている。今、やつとこうした議論ができる環境が生まれつつある。□承文芸の文献学的な研究は、実は、文字によつて対象化してきた□承文芸の根底を問い合わせ、それ自体を搖るがす沃野として存在する。この一二年、喜善という人とひたすら向き合つてきて、そうした思いはますます強くなつた。こう言ってよければ、喜善の業績を読み解いてゆくことは、制度化されてしまつた□承文芸に対する逆襲にさえなつてゆくのではないかと思ははじめている。

注

- (1) 遠野市立博物館編『佐々木喜善——文学から民俗学へ』
(遠野市立博物館、一九八六年)。
- (2) 遠野市立博物館編『佐々木喜善全集』全四巻(遠野市立博物館、一九八六～一九九〇年)。
- (3) 石井正己「解題」(遠野市立博物館編『佐々木喜善全集』

第四卷(遠野市立博物館、一九〇三年)。

(4) 石井正己「佐々木喜善研究文献目録」(遠野市立博物館編『日本のグリム 佐々木喜善』(遠野市立博物館、二〇〇四年))。

(5) 石井正己「『老嫗夜譚』の魅力」(佐藤誠輔『遠野昔ばなし』(遠野物語研究所、二〇〇四年))、石井正己「日本のグリム・佐々木喜善」(遠野市立博物館編『日本のグリム 佐々木喜善』(遠野市立博物館、二〇〇四年))。

(6) 石井正己『物語の世界へ 遠野・昔話・柳田国男』(三弥井書店、二〇〇四年)。

(7) 石井正己「『昔話採集手帖』の方針」(『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』第五四集、二〇〇三年二月)。

(8) 石井正己「昔話叙述の方法——小笠原謙吉と佐々木喜善」(『□承文芸研究』第一八号、一九九五年三月)。

(9) 注8に同じ。

(10) 石井正己「高橋勝利の昔話研究」(『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』第四九集、一九九八年一月)。

(11) 石井正己『遠野の民話と語り部』(三弥井書店、二〇〇二年)。

(12) 注11に同じ。

(13) 注11に同じ。

(いしい・まさみ／東京学芸大学)